悪魔王ナノガイガー 第一部・邂逅編

かがみん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悪魔王ナノガイガー　第一部・邂逅編

【Ｎコード】
Ｎ２９９８Ｍ

【作者名】
かがみん

【あらすじ】
元々、なのは×ガオガイガーで何か書きたいと思いついた時に、最初はスバルを主人公にしよう……とか思ったんですが、やっぱり般若……じゃなかった、なのはさんがいいだろうということで、主役はなのはさんと凱になりました。
こんなネタは掃いて捨てるほどあるとか言われそうですが、まぁＭＡＤとかの影響ですので勘弁してください。

※註

両作品の設定においては、非公式のもの、オリジナル本編との矛盾が多々あります。

ご了承ください。

序章　勇気ある闘いのはじまり（前書き）

オープニング

悪魔王誕生！！

ななな　ななな　ナノガイガー
ななな　ななな　ナノガイガー

叫べ！　管理局のエース
赤い宝石　白いジャケット

希望導くレイジングハート
野望の使者を叩くため

翼で舞い上がれ

人と悪魔の狭間ゆく痛み
胸の奥に秘めて

ななな　ななな　ナノガイガー
ななな　ファイティングナノガイガー

ファイナルフュージョン承認だ
今だデバイス合体だ

豪煌爆砕！
ディバインバスター！！
元気！！勝利！！情熱！！ファイティング！！
誕生！！

不死身のすんごい魔王だ
闘う悪魔王　ななななナノガイガー！！

燃えろ　金色の閃光
紅い瞳に　黒きジャケット

勇気の誓い　NとF
小さな願い照らすため

今こそ復活だ

人の命の尊さを知らぬ　悲しみ解き放て

ななな　ななな　ナノガイガー
ななな　ジェネシックナノガイガー

ファイナルフュージョン承認だ
今だデバイス合体だ

天罰降臨！
エクセリオンクラッシャー！！

勇気！！闘志！！宿命！！ジェネシック！！

誕生！！

エースだ　星々の宝

新たな悪魔王　ななななナノガイガー！！

ななな　ななな　ナノガイガー

ななな　ななな　ナノガイガー×？

熾烈！！激烈！！猛烈！！スターライトブレイカー！！

誕生！！

新生！！　永遠の神話

我らの悪魔王　ななななナノガイガー！！

序章　勇気ある闘いのはじまり

世界の存立を賭け、我が身を犠牲にして戦うものたちがいた。愛する人を、大地を、全てを守るため……

西暦２００７年。
七月。地球を旅立ったＧＧＧ艦隊は、次元ゲート・ギャレオリア彗星を潜って三重連太陽系に到達した。
そこで彼らが見たものは、複製された青の星、地球の姿であった。

滅亡した三重連太陽系の再生を願うソール１１遊星主の狙いも分からないまま、艦隊は地球へと降下。

異変はそこで起こった。

地球防衛勇者隊に違わぬ勇気の持ち主だった隊員たちは腑抜けたように戦いを放棄し、勇者ロボたちは無惨にもＡＩを遮断された。

そして、勇者王も。
鋼の機体と勇気を完膚なきまでに、破壊されていた……。

新歴７５年。
危険な遺失物の捜索を任務とする時空管理局機動六課。いま、彼らは最大の危機に直面していた。
九月十四日。
時空管理局地上本部及び機動六課隊舎は、広域次元犯罪者Ｊ・スカリエッティの手の者によって襲撃、ほぼ壊滅の状態に陥った。
だが。スカリエッティたちの真の目的は、管理局の壊滅ではない。
もっと巨大なる破壊をのぞんでいたのである。

そのために、彼らは一人の少女を拐った。
母への呼びかけも虚しく、少女は連れ去られた。
そして常に勝利を導いてきた魔導師は、少女を救えなかったことに涙を流し、悔やみ、決意する。

我が子を、この身に取り戻さんと。

人類存亡をかけた闘いは佳境に入りつつあった。

新生勇者王を破壊され、複製とはいえ仲間をこの手で傷つけた彼は、絶望の淵に叩き落とされた。

だが。

勇者を信じる者たちの呼びかけによって、彼は再び立ち上がった。

勇気ある誓いと共に。

次元世界の中心。ミッドチルダ。世界の命運をかけた戦いが行われていた。

旧時代の悪夢――――を甦らせ、世界を畏迫する。

スカリエッティの野心に対し、機動六課は決死の抵抗を続けていた。

空と地上で。

ジェネシックオーラ……三重連太陽系の復活に執着するソール１１遊星主が、唯一恐れる力。その力を以って真の姿を取り戻したジェネシック・ギャレオン。余裕を保っていた遊星主もさすがに眉をひそめる。

パルス・アベルは、計画を一部変更することを不本意ながら決めた。そして背後に控える遊星主の一人にある命令を与える。

「例えギャレオンが覚醒しようと、勝利するのは、私たちです」

彼女が笑みを浮かべた瞬間、凄まじい爆発と閃光が、三重連太陽系を満たした。

#1　現れし、使者

轟音と共に、天空へ飛び立った超巨大飛行戦艦。

旧時代の世界を破壊した、”古代ベルカの悪夢の叡知”。

聖王のゆりかご。

ミッドチルダの遥か上空を目指して、飛び続ける。

それを徼え撃つため、ミッドチルダ軌道上に、時空管理局次元航行部隊に属する艦隊が整然と布陣していた。

艦隊を指揮するクロノ・ハラオウン提督は、緊張した面持ちで、事件を移したモニターを観察している。

この、巨大な質量兵器の情報に関しては、無限書庫の司書長ユーノ・スクライアから知らされており、もし、ゆりかごが軌道上に到達し、ミッドチルダ全域を人質にすれば、管理局といえども迂闊に行動できなくなるという。

そう、させぬために、彼のよく知る面々が、ゆりかご内で戦っているはずだった。

（はやて、なのは……）

その時、彼らが予想も出来なかった異変が起こった。

「艦長！」

「なっ……！？」

「時空の歪みを検出！」

「この空間内です……これは」

「すぐ近く、次元震が……」

「シールドを張れ、衝撃に備え――――」

クロノが艦隊の全クルーに、命令を伝えると、異変が起こるのは同時。

漆黒の宇宙空間に、爆発的な閃光が疾った。そして、次元が揺らめき、エネルギーの波が放射状に拡がっていく。艦隊は衝撃を喰らって急流に浮かぶ木の葉のように翻弄され、体勢を立て直すのに四苦八苦した。

その頃。

ミッドチルダにいる機動六課にも、異変が襲いかかっていた。

「なんや！？」

機動六課部隊長八神はやては、空の彼方で起こった突然の爆発と衝撃波に巻き込まれ、体勢を崩された。

「クロノくん！応答願います、一体何が……」

クロノへの通信は通じなかった。ノイズの雑音が聞こえるのみ。

「くっ」

「はやてちゃん……」

傍らのリインフォース？空曹長が、心配そうに呟いた。

成層圏にも吸収されなかった衝撃の余波によって、彼女たち空で戦っていた者たちは、行動に支障をきたしている。皆、飛行制御に必死だ。その一方、聖王のゆりかごはぐんぐんと、高度を上げている。あの衝撃波のただ中で、ややぐらついただけだった。

「させへん！！」

はやてはリインを抱き寄せながら、ゆりかごに向かう。

六課の空戦魔導師たちも同様に、包囲を再構築していく。

だが。

「あっ」

我が目を疑いたくなった。

ゆりかごよりさらに上空に高速度で飛来する、巨大な物体……。

「ゆりかごより、でかい！？」

三段重ねの飛行甲板をもった、巨大空母。

それが、雲を散らしながら猛スピードで落下してくる。

このままではゆりかごと接触してしまう。

惨事の予想にはやては肩を震わせた。

「なのはちゃんたちが……！」

ゆりかごとの衝突が近づく一瞬前、飛行空母は、ミサイルらしき物体を発射した。ミサイルはゆりかごの背を直撃、装甲が砕かれ、建材が空に飛び散る。

だが、一発二発の弾撃ではゆりかごは破壊できない。

飛行空母はついにゆりかごと接触した。

凄まじい音が響いた。

ゆりかごは頭部に当たる部分を粉砕され、速度を鈍らせ、やがて停止した。

巨大飛行空母は、地上へと、渓谷地帯に向かって落ちていく。

「あれは！？」

さらに、もう一つ現れた飛行物体は、流星のように、空母の後を猛追していく。

超音速による衝撃波から身を守るため、はやてたちは防御魔法を発動せざるを得ない。

そして、数秒後、地上から飛行物体が大地に衝突する音が届いてきた。

「一体、何が起こったんや……」

呆けたような、はやての言葉が、風に流れた。

#2　創造神

わけがわからない。
彼女の頭の中には、いま、それだけしかなかった。
万事手を尽くしてきた計画の狂いに、半ば混乱し、ふらふらと立ち上がりながら状況の分析を始める。
「一体、何が……」
彼女は知らず、敵の指揮官と同じ疑問を口にした。
いつもは嘲笑の笑みを浮かべた口元が、不安と懐疑の色に染まっている。
「管理局が……まさか、アインヘリエルは全部破壊したし、それにあんな巨大な艦なんか、次元航行部隊にもなかったはず……」
ゆりかご内部の奥深く。管理制御を行っていた場所だが、巨大飛行物体との接触によって天井の一部は崩落し、辺りには瓦礫と機材が散乱している。
「はっ。それより聖王の間は――――」
あの機動六課のエース・オブ・エースがディエチを倒し、聖王の間に向かっていることは確認している。

その直後、さきほどの衝突のため状況把握が疎かになっていた。

「くっ……」

彼女は地上のアジトに通信を開いた。何度も連絡を送る。しかし、創造主や姉から返事は返ってこない。スクリーンの画像も乱れたままだ。

「まさか、あの執務官が！？」

そんなはずはない。ドクターともあろう人物がたかが人造魔導師ごときにやられるなんて。

「私たちは神。神に逆らう奴らはみんな――――」

「創造神に逆らう者には、絶望と痛みを、ですね」

見知らぬ声に、彼女は振り向いた。暗がりのなかに、小柄な人影が佇んでいた。

フード付きの外套をまとった、少女の姿。

その唇は冷笑が浮かんでいる。かつて、彼女、クアットロも浮かべていた、蔑みの笑み。

「何者！？」

驚愕するクアットロ。

少女は答えた。

「私は神。貴女たちよりも遥かに進化した、ね」

赤の星の指導者アベルは、謎めいた言い方をした。

「な……」

警戒したクアットロは、自身のＩＳを発動させようとした。

「安心してください。私たちが貴女たちのかわりに、この世界の神になって差し上げますよ……」

クアットロより早く。

全身から砲身を生やしたアベルは、戦闘機人に狙点を定め、砲撃を放った。

「この世界に新しく再生した、三重連太陽系の、ね」

アベルの言葉は爆音に掻き消され、届かなかった。

#3　邂逅する者たち

聖王のゆりかご。

高町なのはは、船内を飛び進む。
少し前、突然、轟音と共にゆりかごに衝撃が走り、なのはは隔壁に叩きつけられた。レイジングハートがとっさに張ったバリアによって、怪我などはなかったが、ゆりかごの動きが遅くなったことに焦りが生まれた。
ヴィヴィオに、よくないことが起こったのかと思ったからだ。心配が募るなのはは、急いで艦の中枢、聖王の間を目指す。

なのはは、速度を上げ、求める場所へ。

だが。
聖王の間にたどり着いたなのはには、予想とは違う出会いが待っていた。空中に、ヴィヴィオが成長したと思われる少女と、彼女を抱える長身の男が浮かんでいたのである。

聖王の間は、天井に穴が空き、床面には瓦礫が散乱していた。

（医者？）

白人の男性に見えるが、普通の人間ではあるまい。
背には羽があり、その皮膚は淡く発光している。
なのはが医者と見間違えたのは、この男が白衣を着、内視鏡を思わ

せる器具などを装備していたからだ。
（彼も……戦闘機人？）
なのはは立ち止まって、男を見上げる。
レイジングハートを構え、降伏を促す。
「投降しなさい。おとなしくしていれば、攻撃はしません」
「ふっ……」
男は唇の端を吊り上げた。
嘲り。
「この娘……」
と、抱き抱える少女を見ながら呟く。
少女はぐったりとしている。
髪型や顔の造作から、間違いなくヴィヴィオだと、なのはは確認した。
「面白い生体構造をしているな」
「……？」
「人工的に培養された肉体。融合した高エネルギー結晶体」
彼が掌をヴィヴィオの胸元にかざすと、赤い輝きが浮かび上がった。
レリックの光。

「これは……ソルダートのジュエルジェネレーターに近いシステムのようだな……興味深い」
実験動物に対する感想のような物言いに、なのはは酷薄さを感じた。
「その子をどうするつもり！？」
レイジングハートを向け、叫んだ。
「さぁ、な」
白衣の男は短く言うと、高度を上げた。飛び去ろうとする。
「拘束させてもらいます！」
なのははバインドを発生させようとした。
「……無駄なことを」
男の内視鏡のようなアイマスクから、緑の輝光が生じ、その中心に反転したGの紋章が浮かび上がる。
「はぁっ！！」
男は衝撃波を放った。
なのははプロテクションを発動、防御する。
「抵抗するなら、撃つ！」

なのはが砲撃に移ろうとした時、男がさらなる行動に出る。
無数の球体を召喚、男はその集合体と融合した。
「ケミカルフュージョン！！」
「なっ！？」
『パルパレーパ！！』
巨大ロボットの叫びが、ゆりかごを揺るがした。
（ユニゾン！？　……でも、こんなの見たことない）
動揺するなのはに、巨大ロボット――パルパレーパ・プラスの剛腕が襲い掛かる。
なのはは飛びすさって、その一撃を回避。かわりに床が破壊される。構造材が欠片と化して周囲に散った。
『ふっ……逃げるが関の山か』
「シュート！！」
アクセル・シューターを起動、斉射。
四方から誘導弾が迫る。だが、パルパレーパは避けようともしなか

った。

『そのような攻撃で――』

着弾。

『……創造神が、この、パルパレーパが傷つくかぁ！！』

パルパレーパ・プラスの装甲はなのはの魔法を跳ね返す。

「くっ」

『次はこちらからだ』

パルパレーパは右手をメスに変え、なのはに向かって刺突を繰り出す。速い。

前方にバリアを展開。受け止めるが、とてつもないパワーの前になのはは弾き飛ばされた。

「うあっ！！」

彼女は隔壁にぶつかり、倒れ込む。

『弱いな……この世界の人間も』

淡々と、パルパレーパは口にする。

『とどめだ』

「まだっ！」

なのはは苦痛に顔を歪めながらも、立ち上がった！
このくらいで不屈の心は、折れ曲がらない。
『愚かな。苦しみが増すだけだというのに』
「ヴィヴィオを……返して……もらう」
なのははレイジングハートの先端を巨人に向け、構える。
『くだらん！！』
メスを振り下ろす。
「レイジングハート！！」
《Ｄｉｖｉｎｅ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》
十の光弾がパルパレーパに向かう。
『はぁっ！！』
腕の一振りで、シューターを切り裂いた。
「うっ……」
唇を噛み締め、なのはは次の一手を打とうとする。
『無駄だっ』

パルパレーパ・プラスは猛然と襲いかかってきた。

そこへ――

「パルパレーパァァァァァ！！」

叫びと共に、なにかが戦場に分け入ってきた。
天井に開いた裂け目から、一人の青年がパルパレーパ目掛けて飛来する。

「あああああぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

『貴様は！？』

青年はパルパレーパの頭部に着地、すかさずそこを蹴って宙に浮遊する。

「はぁぁぁっっ！！」

青年がパルパレーパにかざした左掌から、無形の衝撃波が放たれた。

『むっ、Gストーンの衝撃波か！！』

パルパレーパは腕を上げて攻撃を防ぐ。もとより、こんな衝撃でやられるような相手ではないことは青年も充分承知している。
とはいえ――

『ぬぅぅ。これは』

パルパレーパ・プラスの腕の一部が分解され、消失していた。
『ジェネシックオーラ……Gストーンを通じて体内に蓄えていたか』
青年はなのはの傍らに降り立った。
「……」
なのはよりやや年上の、長身の若者だった。
茶色がかった長髪に、引き締まった肉体。
彼はゆっくりと、左手の甲を前に掲げてみせた。
そこには、鮮やかな青緑色の光とGの紋章が浮かびあがっていた。
パルパレーパの反転したようなのではなく、本物のGの紋章だ。
『貴様も来ていたとはな。青の星の勇者。獅子王凱よ』
（獅子王……凱……）
なのはは、凱と呼ばれた青年を見た。恐らく自分と同じ地球の出身か。あるいはスバルのように先祖が地球の生まれなのだろうか。
「あの……」
なのはが声をかけようとした時、青年が振り向いて言った。
「俺が奴を引きつける。その間に君は逃げろ」
真っすぐな眼差しで彼は告げた。

「……だめよ！」

「奴は恐ろしい相手だ。だけど――」

「待って、あのロボットの中には私の……」

『なにをゴソゴソ言っている？』

傲慢な態度でパルパレーパは二人を見下ろした。

『たった一人加わったところで、戦況が変わるとでも思っているのか』

心底、見下した言い方であった。

『青の勇者よ、ギャレオンはどうした？　ラティオは？』

「……」

『ふん、もはやメカノイドにフュージョンすることも出来ぬ貴様が、この私と戦えると、本気で思っているのなら、これほど愚かな考えはないな』

「パルパレーパ……！」

『そもそも、すでに貴様との決着はとうに着いている。あの時、ガオファイガーを破壊した時にな！』

「あぁ、確かに、一度は貴様に敗れた……」

凱の声は、静かだが、強さに満ちていた。なのはには、そう感じられた。

「だが、それは俺が俺の勇気を信じられなかったからだ……」

苦みのある成分を含んだ言葉が、なのはの耳朶をうつ。

「だけど、もう俺は――」

『死に損ないの人間がなにを！』

激高したパルパレーパは、凱に挑みかかる。

「駄目だよ！！」

なのはは凱の前に回り込み、砲撃を撃とうとする。

「よせ！！」

彼女は凱の制止を無視した。

そして、パルパレーパ・プラスは、ひと思いに二人の命を絶つべく必殺技を使う。

対するなのはも、必殺の砲撃を撃つ準備に入った。

――星よ集え！

本来はこのような建造物の中で使用する魔法ではない。だが、巨大なゆりかごの内部はかなりの奥行きと広さを持っている。この魔法を撃っても、艦を崩壊させるような被害は出ないと踏んでいた。

『いくぞ、異界の人間よ』

「待て……」

「スターライト……」

『ゴッド・アンド・デビル！！』

「ブレイカー！！」

「やめろっ……！！」

三人の絶叫が重なった。

ドギュン！！！！

なのはが撃ち放った光の束と、パルパレーパ・プラスの両手が合わさった鉗子（かんし）の攻撃が、衝突する。

「そんなっ！？」

高速で動き、スターライト・ブレイカーの光を打ち砕いたパルパレーパのゴッド・アンド・デビルが、真っ正面からなのはを狙う！

「ちぃっ」

このままではなのはは押し潰される。

凱はなのはの前に回り込んだ。

それは、ほんの数秒間の出来事であった。

なのはは飛翔しつつ、防御を展開しようとしたところに、凱が視界を遮るように飛び出し、そこに凄まじいスピードでパルパレーパ・プラスの鉗子が迫る。

「ぐわぁぁぁっ」

鉗子は、まともに凱の身体を直撃した。

「ああっ！」

「ぐぉぉぉっ」

『最期だ、死に損ないの勇者よ！』

凱の肉体に、鉗子がめりこむ。裂けた傷から鮮血が噴き出した。

「ぬぅぅぅ！！」

それでも、凱の闘志は衰えない。意識を高め、左掌のGストーンに力を集める。

緑の光と赤い雫が、背後にいたなのはの体に、さながら雨粒の様に降り注いだ。

白いバリアジャケットとレイジングハートは凱の血で汚れた。

＃４　死神

時空管理局執務官フェイト・Ｔ・ハラオウンは、広域型次元犯罪者ジェイル・スカリエッティを追い詰めんとしていた。

真・ソニックフォーム。
極限まで速撃性を追及した最終形態。

ふた振りの双剣と化した「閃光の戦斧」バルディッシュを構え、不遜なる技術者に相対する。

ここはスカリエッティの本拠地であり、古代ベルカの遺産「聖王のゆりかご」が眠っていた場所でもある。迷宮のような地下施設に数々のラボと、人造魔導師素体のオリジナル達が物言わず、佇んでいた。

ジェイル・スカリエッティ。
全ての事件はこの男が元凶だった。自分の出生さえも、だ。

見た目は知的で穏やかな風貌の研究者、といったいで立ちだが、彼によって玩ばれた生命は数限りない。

恐らくは、生命創出に固執していたこの技術者は、幾度も管理局の追及を逃れ実験を繰り返してきた。

プロジェクトF。そう呼ばれる研究を行ったのも彼だ。
この、究極の人造生命を創り出す実験の過程において、フェイトは誕生した。
スカリエッティが築いた人造魔導師創出の基礎理論を発展させ、完成させたのが、プレシア・テスタロッサだった。
天才的な技術者であり、フェイトをこの世に生み出した創造主。
かつて、事故で愛児を喪ったプレシアは人造生命創出の技術を用いて娘のクローン体を純粋培養で創りあげた。生前と変わらぬ姿のクローン体に、保存しておいた記憶を転写する。これで娘は甦えるはずだった。
しかし。目覚めた娘は生前とは違っていた。……こんなのは私の愛したアリシアではない。忌まわしい鏡像の如き娘をプレシアは「失敗作」として廃棄しようとした。だが、どうせなら真にアリシアを復活させるための道具として使うのがいいと、彼女は思いついた。
そうして、人造生命創出実験の名称から「フェイト」の名前を与え、偽の記憶を植え付け、戦闘訓練を受けさせた。こうして、若干九歳にして優れた空戦魔導師フェイト・テスタロッサが誕生したのだ。

フェイトは母親の命令を受け、強大な力の源である遺失物ジュエルシードが散らばった、地球に向かった。
そこで、ジュエルシードの捜索を行っていた高町なのはと出会った。
それは、フェイトの運命を変える出会いでもあった。

それから、数年。彼女は時空管理局の執務官として、自らの父ともいえる男と戦っている。

皮肉なことだ、とフェイトは思う。
彼が生命操作の技術を確立しなければ、プレシアは人造魔導師の素

体を産み出せず、自分はこうしてここにいられなかったかもしれない。

勿論、この男を父と認めるフェイトではない。母、プレシアならまだ理解できる。理解しようと努められる。

二人の狂気の度合いは正反対と言っていいだろう。ただ愛する娘と取り戻したかっただけのプレシアと、自身を神として生命を操る、己の知的好奇心を満足させるために命を玩び、奪うスカリエッティとは、そもそもベクトルが違うのである。

フェイトは人工の生命として生まれてきたからこそ、眼前の男を許せなく思う。

望まれて誕生したのに役立たずと解れば棄てられる。

そんな可哀相な子供達の運命を誰よりも知っているから。

自分やエリオのような子たちをこれ以上増やさないためにも。この男を、倒す。

「どうしたのかね？　私を捕らえるんじゃなかったのかい？　いや、殺したかった……かな？」

自分の魔法拘束を抜け出し、自慢の作品を倒されても、スカリエッティに動揺は見られない。飄々と立ち尽くすフェイトに訊ねる。

追い詰められた犯罪者とは思えない。

実際にスカリエッティにはある勝算があった。

フェイトは与り知らぬことであったが、彼の開発した戦闘機人達の体内には彼の複製体が納められていた。
彼が万一、死んだところで新たなジェイル・スカリエッティが誕生するだけだ。

「……！」

フェイトがスカリエッティに、バルディッシュを叩きこもうとした、その時。

地下施設が大きく揺れた。
続いて、鈍い破壊音が遠くから響いてくる。

「！？」

「おや……」

フェイトは思わず足元を掬われそうになった。

「ドクター」

今まで黙って推移を見守っていたナンバーズの長姉ウーノが、モニターを観測して報告した。

「こちらの近くで、巨大な物体が落下しました」

「おや？」

「聖王のゆりかごとも連絡が取れません」

「ほほぅ」

目を丸くして、スカリエッティは考えた。

「どういうことだ！？」

フェイトが詰問した。

「さぁ、ね」

と、そっけない回答が返ってくる。

いずれにせよ、早くスカリエッティ一味を逮捕しなくては。

フェイトはバルディッシュを構え、攻撃態勢を整える。

――が。

フェイトは奇妙なモノを見た。スカリエッティの背後に、ゆらりと立つ長身の影がある。

（死神？）

その姿は伝承に語られる死神の外見によく似ていた。

黒い細身の体に、赤い双眸。長大な鎌を持ち、音もなく現れる。

「ドクター！」

「ん？」

振り向く時間もなかった。
一閃した鎌が、天才技術者の頚を切り取った。
「ああっ！？」
「スカリエッティ！」
驚愕の悲鳴が地下に木霊した。首は放物線を描いて地面に落ちる。
頭を失った身体は、しばらくして下に倒れた。
死神はなんの感情も見せずに、フェイトの前に出る。
「貴様……何者だ。スカリエッティの仲間か？」
答えはない。
（仲間割れなのか、それとも）
外界に落下したという巨大物体と関係あるのか。
犯罪者とはいえ、命を奪ったのなら、執務官としては、捕らえる以外に選択肢はない。
だが。
勝てるのか。
こいつの腕前は相当なものだと、フェイトは見ていた。
（こいつも戦闘機人なんだろうか？）

疑問は戦えばわかる。

「はぁっ」

剣が閃く。一瞬で間合いを詰めたフェイトが死神に斬撃を見舞う。
死神は鎌を操ってそれを受け流した。

「くっ」

さらに攻撃を仕掛けようとした時だ。

「！！」

天井をすり抜けるように出現した長い物体が地面に衝突し、そこから二人の人物が飛び出してきた。

「ピア・デケム！」

「遊星主は、こいつ一人だけか！？」

死神は素早く間合いを開け、次なる戦闘に備えた。

「一体、これは……」

現れた戦士たち。
それは、ＥＳミサイルを使って地下施設に駆け付けた、赤の星のソルダートと、Ｇストーンのサイボーグであった。

「……！？」

フェイトは何が起こっているのか、起こりつつあるのか、わからなくなってきた。

「……」

死神の双眸が微かに揺らいだ。それは強敵と戦う事ができる喜び故か。

ソール１１遊星主ピア・デケムは、自分たちを追ってきたソルダートＪ－００２に鎌の切っ先を向けた。

#5　緑の髪の少年

機動六課スターズ分隊副隊長「鉄槌の騎士」ヴィータは、満身創痍の身体を引きずりながら、聖王のゆりかごの動力源がある駆動炉を目指して、艦体後部を進んでいた。

ゆりかごを護るガーディアン、ガジェット？型との戦いによって傷ついた彼女は、著しく体力と魔力を消耗している。

だが、それでもゆるぎない足どりで目的の場所へ向かう。

（この船の動力源をぶっつぶして停める……そして、なのはもヴィヴィオも、護る！）

強い意思で体を支え、たどり着いた駆動炉。

そこは、天井の高い、宏大な部屋だった。巨大で幾何学的な赤い結晶をした推進機関が鎮座している。これを破壊すれば聖王のゆりかごの飛行を止められるはず。

「いくぞ、アイゼン！」

古代ベルカ式アームドデバイス、鉄（くろがね）の伯爵グラーフアイゼンに呼び掛けた。

（……ん？）

結晶を見上げたヴィータの目に、人影が映った。

（蜂？）

いや、人間？

駆動炉の上に一人の女が立っていた。
アイマスクに隠された目。深紅の唇。妖艶な雰囲気を纏っているが、
そのフォルムは普通の人間ではなかった。
背には四枚の翼、右手には針が生え、それよりさらに尻にも大きな
針が生えている。それは蜜蜂のものに酷似していた。

「いらっしゃぁい、子猫ちゃぁん」

粘着質な声で女は言った。

「てめぇ、スカリエッティの仲間か」

「知らないわねぇ、そんな名前」

「なんだと……！？」

警戒しつつ、ヴィータはグラーフアイゼンの形態を変化させる。

「アイゼン！」

《Ｒａｋｅｔｅｎ　ｆｏｒｍ！！》

尖端はドリルに、後部は噴射口を備えたロケットに変型する。

「ラケーテンハンマー！！」

「ふふふ……この辺を一人で調査するのも、もう飽き飽きなのよねぇ」

わざとらしく女がため息を吐いた。

「退屈しのぎに私とあそびましょう、子猫ちゃん」

女は左手から鞭を繰り出す。

「てめぇに構っている暇はねぇんだよ！！」

ヴィータはロケットから爆風を吹かせながら、跳び上がった。一撃で決める。

「つれないわねぇ～」

女は余裕だ。

鞭を巧みに操作し、ヴィータの体を打つ。

ヴィータは鞭の攻撃を魔法で防御しつつ、ハンマーのドリルを女にぶち込む。

「おりゃぁぁぁ」

しかし、羽根を震わせ飛行する女は力任せの打撃をするりと避して、天井高く移動した。

そこから無数の鞭をヴィータに浴びせる。

「うわぁぁ！！」

赤い騎士甲冑が破れ、皮膚には血が滲んだ。

「くぅっ」

苦痛に呻きながら、ヴィータは床面に降り立った。

「くそっ、あいつに食らった傷が……」

これより前、ガジェットとの戦闘で、ヴィータは胸に重傷を負っている。このままいつまで戦えるか、疑問だった。

「てめぇ、何が目的だ」

「子猫ちゃんには関係ないことね」

女は空中をジグザグに飛び回り、ヴィータに迫った。

「なにしろ、これから死んじゃうんだもの！」

ごおっ！

右手から炎が噴き出し、ヴィータを包みこんだ。

「うわぁぁぁっ」

ヴィータはフィールドを発生させ、炎を打ち消そうとした。

防御魔法のうち、フィールド系は特定の効果を持った現象（高温な

ど）を遮断する場を形成させる魔法である。

「ふざけんな！！」

蜂のひと刺しを避けたヴィータは、反撃に出た。

「炎には炎だ！！」

再びハンマーフォルムに戻したアイゼンで、発生させた数発の鉄弾を叩く。

《Ｆｌａｍｍｅ　ｓｃｈｌａｇ！！》

加速した弾は孤を描きながら、八方向から女を急襲する。

「ふっ」

凄まじい速さで鞭を旋回させ、弾を弾いていく。

――しかし。

鞭捌きに捉えきれなかったひとつの弾丸が、彼女の脇を打った。

「なにぃ」

ボアッ！！　着弾と同時に炎が燃え上がる。

通常の打撃に加えて触れたものを可燃させるフランメ・シュラークの一撃。

「この餓鬼ぃ」

汚く罵りながら、ヴィータに復讐の鞭を振るう。

「だぁぁっ」

カートリッジ・ロード！。

薬莢を一つ吐き出し、ハンマーが唸る。

《Ｔｏｄｌｉｃｈ　ｓｃｈｌａｇ！！》

ヴィータの最も得意とする攻撃。

魔力で強化された疾風の綱弾が、防御ごと相手をぶち抜き、破壊する必殺の魔法だ。

「もう通じないわね！」

弾の軌道を見切った女は、全ての弾を弾き返し、あるいは粉砕した。

弾かれた弾丸はゆりかご内の壁の何箇所かを穿ち、ひびをいれる。

「なんてやつだ」

奥歯をかみ締め、ヴィータが睨む。

「あなたの攻撃はこれだけ？」

馬鹿にした言葉遣いに、ヴィータは拳を震わせた。

「てめぇ……」

「遊びはここまでよ、子猫ちゃん」

女は次こそとどめを刺さんと、構えた。

その時である。

テートリヒ・シュラークによって崩れた壁の向こうから、緑色の光が差し込んだのだ。

そして目に見えない波動が女に注がれる。

「ぐわぁぁ！？」

女の羽根が、左腕が、髪の一部が、粒子となって消滅した。

「ジェネシックオーラ……まさか！？」

驚愕して女は地面に墜落した。

さらに、壁を砕いて巨大なモノが、ゆりかごの中に入って来る。

ゆりかごの駆動炉に勝るとも劣らぬ大きさの――

「鋼鉄の……獅子？」

金色に輝くたてがみ。白き四肢。雄々しき勇姿が艦の壁面を砕き、女の前に立ちはだかる。

「ギャレオン！」

女は仇敵の名を呼んだ。

宇宙メカライオン・ギャレオンは、静かに顎を開きはじめた。口蓋から柔らかい緑の光が漏れだす。

やがて。
一人の小さな少年が、気を失った女性を抱き抱えて、外へ出てくる。
緑の光に包まれた体。頭上には天使の輪のような光輪があり、翼もつ髪を逆立てた少年――
「ラティオ……」
女の顔に初めて焦りが浮かんだ。
「ソール１１遊星主ピルナス――君たちの好きにはさせない」
強い口調で少年は訴えた。
「ほざけ！」
少年にピルナスが無事な鞭を放つ。
少年の額に浮かぶＧの紋章が、輝きを増した。
左手を突き出し、防御力場を生み出す。
「ちぃっ」
ピルナスの攻撃は少年に届く前に防がれてしまう。
「うぅっ！」
さらに、ギャレオンの咆哮と共にピルナスに向けて放たれたジェネシックオーラが、彼女の肉体を崩壊させる。
「ジェネシック・ギャレオン……さすがに対遊星主アンチプログラ

ム、私一人じゃあ、ちょっと厳しいわね」

不利を悟ったピルナスは、跳躍して、天井に蹴りを食らわした。天井が破砕して出口を造った。ピルナスは建材の雨を降らせながら、ゆりかごの外へと逃走する。

「逃げられるっ……」

追おうとした少年であったが、傷ついたヴィータの姿を認めると、追跡を諦めた。

女性をそっとギャレオンの口蓋に置き、ヴィータに近づく。その背中にはピルナスとよく似た羽根があった。

ヴィータの傍らに着くと、癒しの力を注いで、彼女の傷を治していく。

ヴィータは不思議な安らぎを感じた。

「お前たち……一体何もんなんだよ」

「それは、話すと長くなるから……」

そもそも彼自身、自分たちに起こった現象を詳しく把握していない。

「まぁ、いいさ。助かったよ。礼を言うぞ」

「うん。君はどうするの？」

ヴィータはグラーフアイゼンを握りしめ、言った。

「こいつをぶっ壊す」

ハンマーフォルムからラケーテンハンマーに変える。今度こそ、駆動炉を破壊してやる。

「いくぞ、おりゃあ！！」

振り下ろされたドリルの一撃。結晶にぶち当たり火花が散る。

「うわぁ」

しかし。駆動炉には傷ひとつ付かず、かえってヴィータは吹き飛ばされてしまうのだった。

「ちきしょう、この野郎」

ヴィータは立ち上がり、またアイゼンを掲げる。

「待って！」

少年がヴィータを制止した。

「君、これを壊せばいいの？」

「あぁ……こいつを破壊すれば聖王のゆりかごは推進能力を失うはずなんだ」

「僕にやらせて」

「お前が？」

少年はすたすたと駆動炉に近づくと、精神を集中した。

「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォ……」

破壊の力、防御の力。その二つを一つに結び付ける技。
彼がGクリスタルに蓄えられていた知識に触れた時に知った、攻防一体の技。

「ウィータ！！」

組み合わせた掌を、駆動炉に突き出す。

緑の閃光が、部屋を満たした。

「……！！」

ヴィータは瞠目した。

ゆりかごの動力源である駆動炉が、音をたててひび割れていく。そして、粉塵を撒き散らしながら、細かい結晶へと化して砕けていった。

「真のヘル・アンド・ヘブン……オリジンの僕も使えたよ、凱兄ちゃん」

少年は感慨深げに呟いた。

「これでよかったかな？」

振り向いて少年は、ヴィータに訊いた。

「あ、あぁ……」

ヴィータは呆然と、頷き返す。

少年……天海護(あまみ・まもる)は、ギャレオンの口蓋部に乗り込むと、女性の顔を凝視した。

「早く目覚めて、命姉(みこと)ちゃん……凱兄ちゃんを助けるために」

「そいつ怪我してるのか？」

「うぅん。気絶しているだけだよ。はっ……！」

ギャレオンが首を動かした。

隔壁の向こう側に鋭い眼差しを向ける。

「ずっと前の方に……他の遊星主がいる！」

「おい、そっちには、なのはが……！！」

ヴィータは顔を真っ青にしてギャレオンを見た。

「あんな化け物にやられたら……」

数年前の、なのはが重傷を負った出来事が脳裏を掠(かす)めた。

もうあんな光景は、二度と見たくはない！

「おい！」

「うん。ギャレオン、命姉ちゃんをお願いするね」

戦場に行けない不満か、ギャレオンはやや行動を渋ったが、結局は護の言う通りにした。

「行こう！」

二人は宙に浮かぶと、ゆりかごの艦首の方に向かって飛んでいった。

一方、部屋に残ったギャレオンは、動力源が破壊された時に自動的に作動する防衛システムから、命を守り抜く戦いを、開始する。

#6　サイボーグ

「全く、訳が解らなくなってきたよ」

「！」

突然、傍らから聞こえてきた声に、ジェイル・スカリエッティの作品・戦闘機人Ｎｏ．１ウーノは、その身を強張らせた。

「っ！？」

バインドが、ウーノの全身を絡みとる。

「見たこともない連中が次から次に現れる……一体何がどうなっているんだろうね」

降って湧いたように出現した髪の長い青年は、そう言って肩をすくめた。

「さて、ちょっと君の頭の中を査察させてもらうよ……あの死神みたいな奴らの手がかりがあるかもしれないしね」

時空管理局の査察官ヴェロッサ・アコースは、魔力光で輝く手を、ウーノに向けた。

一方。
少し前。機動六課の若きフォワードたちは、それぞれの場所でこの世界に訪れた異変を察知していた。

洗脳が解けたギンガを抱き起こしたスバルが。
戦闘機人たちを打ち倒したティアナが。
気絶したルーテシアを抱えたキャロが。エリオが。
ヘリに乗るヴァイスが。アースラにいたシャーリーたちクルーが。
シグナムやシャマル守護騎士たちが。

皆が、天空から峡谷に落下していく巨大な飛行空母の姿を目撃していた。
空母はスカリエッティのアジトの近傍に墜ち、土砂の中に埋まった。
その、巨大空母を追いかける様に出現した飛行物体が、アジトのある断崖の上に墜落していく。

白い飛行物体の正体は、三重連太陽系の赤の星で生まれた、宇宙最強の超弩級戦艦ジェイアークであった。

その、ジェイアークは危機の渦中に見舞われていた。
敵の巨大空母……ピア・デケムを追跡してきたものの、充分な出力が得られず、航行能力も低下している。

彼ら、赤の星の戦士たちの創造主アベルによって、エネルギー源であるＪジュエルを凍結されたソルダートＪ－００２、さらにジェイアークの管制を司るコンピューター、トモロ０１１７にも機能停止を命じられたのだ。

艦はこの世界の重力に引きずられ、墜落を余儀なくされた。あと数瞬で激突しそうになった時、Ｊは奇策を使った。

ＥＳ空間を通ることで、物質を透過できるＥＳミサイルを利用したのである。

手動でだが、手早くミサイルを起動、Ｊと同乗していたルネ・カーディフ・獅子王はＥＳミサイルで地下に広がる空間に逃れ、ジェイアーク自身はＥＳウィンドゥから別の平野に軟着陸させた。

その地下空間には、ソール１１遊星主の反応があったのだ。

地下――スカリエッティのアジトへと乗り込んだソルダートＪは、宿敵たるピア・デケムを発見した。
ルネも彼に続く。

ルネ・カーディフ・獅子王。フランスの対特殊犯罪組織シャセール

の捜査官であり、地球で唯一のGストーンサイボーグだ。
コードネームは《リオン・レーヌ》すなわち、獅子の女王である。
そう、この17歳の少女の体内には、熱き獅子の血が流れていたのである。
彼女は自分に敗北の屈辱を舐めさせた遊星主に対し、怒りを燃やしていた。
必ずやられた借りを返す。
もちろん、数倍にして、だ。
そのためにも、ここで負けてなどいられない。

そのような事情を一切知らないフェイト・T・ハラオウンは、困惑の表情を浮かべて、新たな闖入者を見たのだった。一瞬、彼女の手が止まる。その隙をついて死神がフェイトに刃を放とうとしたが、横から現れた戦士の蹴りによってその斬撃は阻止された。

鳥の姿を思わせる装甲を纏った俊敏な戦士に、赤い髪をたてがみのように逆立てたコートを着た少女。

二人は普通の人間とは思えない部分が認められた。

（戦闘機人？）

フェイトの目の前で、薄緑の装甲の戦士が死神に立ち向かう。死神

は鎌を振るい、戦士は回避する。
頭部装甲によりその表情は伺い知れぬが、なにか焦ってる風に見えた。

「J！！」

少女が叫び、死神に拳の一撃を繰り出す。
強力なパンチを食らい、わずかに死神が後ずさった。
だが戦士は腕を振り上げた格好で、固まっていた。

「くっ、Jジュエルが……このまま戦っても……」

「J……！？」

決定打がない。彼は戦闘能力のほとんどを封印されてしまっている。

（加勢したほうがいい）

フェイトの勘が告げていた。
だが、ＡＭＦ下でザンバーフォームから、真・ソニックフォームまで、限界を振り絞って魔力行使を続けてきた。バルディシュにも相当な負担がかかっているはずだ。
これ以上の行動はフェイトにとって、苦痛以外の何ものでもない。

だが。
二人の戦士を見捨てる訳にもいかない。
それに、エリオとキャロがこちらに向かっているはずだ。あるいは局員たちも。それまでにこの死神を牽制できれば。

「はぁっ」

真・ソニックフォームでの彼女ならば、ソルダートＪをも越える。
神速で移動したフェイトは、プラズマの剣刃を死神――ピア・デケムに叩き込む。

がきぃぃ！

死神の鎌と剣が火花を散らす。

斬撃を受け流されたフェイトは、瞬時にフォトンランサーを起動。
威力は地下内なので崩落を恐れて低く設定した。

「ファイア」

ランサーの数は十二。
雷の矢がピア・デケムに発射される。

「うわっ」

慌ててルネは死神の側から離れた。ピア・デケムがランサーを回避しながら打ち落とそうとするが、ランサーには自動追尾機能を付加してある。
ＡＭＦ下の魔法はフェイトに疲弊を強いたが、気力でカバーした。

「！」

ランサーがピア・デケムの胴体に着弾。彼を数メートル吹き飛ばした。

倒れたピア・デケムにルネが駆け寄る。
胸を踏み潰すつもりだった。
しかし、人間離れした速さで起き上がり、逆にルネの足元を鎌で薙いだ。
「くっ」
跳躍して避けたルネに、死神の回し蹴りが向かう。
その蹴りを、彼女は同じ蹴りで受け止めた。両者は交錯し、着地。
フェイトは、その瞬間を狙ってピア・デケムのもとへ、踏み込んだ。
フェイトのライオットザンバー・カラミティが、鎌の柄を両断し、刃を砕いた。
空手になったピア・デケムは素手で攻撃するが、シールドに阻まれる。
「ピア・デケム」
だが新たな声が降ってきたことで、その戦闘は中断させられる。
「きゃあぁっ」
「うわぁ」
緑の光がフェイトとルネを撃った。
「貴様は!?」

その男の相貌を見て、Ｊが驚いた。

「緑の星の守護神！」

衣装のフードから覗くその顔は、穏やかな壮年の男性のものだ。
だが、しかし……彼は遊星主。Ｊの味方にはなりえない。

「カイン！！」

Ｊジュエルの力を封じられたＪには、二人の遊星主と戦うことは難しい。
ルネも疲労が激しい。
この世界の原住民とおぼしき娘も、事情は同じに見えた。

「ピア・デケム、アベルが我らを呼んでいる」

死神の隣に降り立ったカインは、威厳のある声で告げた。

「この場所での用事は済んだ。アベルの元へ戻るぞ」

彼は自主的に喋っているように見えるが、実は彼に意思と呼べるものはない。すべて、アベルの望む通りに動く操り人形がこのペイ・ラ・カインだった。
ここでもそれらしく伝えただけで、単なるメッセンジャーに過ぎなかった。

ピア・デケムは承知した
。と、同時に、この部屋に小柄な少女が入ってくる。

「フェイトさんっ」

「キャロ！」

ライトニング分隊ライトニング2キャロ・ル・ルシエ。機動六課フォワード、フルバックを担う少女である。
その後ろから、同い年くらいの少年、エリオ・モンディアルが姿を現した。キャロと共にフェイトの部下を務めるライトニング1、ガードウィングの若き騎士。召喚士ルーテシア・アルピーノとの戦いを制して、フェイトの救出に駆け付けたのだ。

二人に続いて地上部隊の武装局員たちが、円陣を組んで遊星主たちを包囲。
他に、倒れ伏した戦闘機人の拘束も行っている。

「アルケミックチェーン」

キャロの拘束魔法が発動。
煉鉄召喚。
魔法陣から飛び出した鎖が、ピア・デケムとペイ・ラ・カインに巻き付いた。
だが、カインの発した念動の力は、ブーストされたアルケミックチェーンを易々と破壊した。

「そんな！！」

「ストラーダ！！」

エリオはデバイスを構えて突進した。電撃を穂先に纏わせ、カインに狙いを定める。

カインは余裕の表情で、右手を頭上に上げ、ラウドGストーンの力を解放。緑の光が天井を打ち抜いた。

「うわっ」

爆発で飛散する瓦礫のために、エリオは止まらざるを得ない。防御魔法で身を守りながら、カインたちの行方を追った。

ピア・デケムとカインはすぐさま破壊した天井から脱出したようだった。

（奴め、地上まで貫通する力を放ったのか）

Jが戦慄する。

もやはどこにもその影が見当たらない。残念だが遊星主には逃げられたようだ。

「崩れる！」

破壊された天井から、瓦礫と土砂が落ちてきた。フェイトたちのいる空間が、腹に響く振動とともに小刻みに揺れはじめる。

「アジトが崩壊するかもしれない。ここを出よう」

フェイトが全員を促した。

キャロが結界で瓦礫から皆を守り、局員たちと共に待避する。

「執務官」

地上部隊を率いるリーダーらしい局員が、報告した。

「現在、ゆりかご内以外の戦闘機人をすべて逮捕、またこのアジトに実験用に保管されていた人間たちを全員保護しました」

「わかった。ありがとう、助かった」

フェイトは短く言う。

「とにかく、脱出しよう。早くゆりかごを停めないと……」

（なのは……）

フェイトの胸に心配が込み上げてくる。
親友の無事を願いながら、スカリエッティの本拠地を走る。
その後を、Ｊとルネが追いかけた。

（なんとかして、Ｊジュエルの機能を復活させないと……）

「Ｊ、大丈夫か」

ルネが訊いた。

「あぁ……。それにしても、ここは三重連太陽系ではないようだな」

「地球でもなさそうだ」

Ｊには異界に来たという実感が、まだなかった。
この世界については、少し後になってから、知ることになる。

「どこであろうと、我々の目的は変わらない」

きっぱりと、Ｊは宣した。

「遊星主共を倒し、アルマを取り返す！」

どのような苦境に立たされようと、ソルダートＪの闘志は衰えることを知らない。

「……そうだな」

獅子の女王の口元に、小さな笑みがこぼれた。
この男も自分と同じく、諦めが悪い性格らしい。

だが、そんな男だからこそ、命を預けられるとも、彼女はおもっていた。

#7　勇者たち

聖王のゆりかご。

パルパレーパに追い詰められた獅子王凱と、高町なのは。

ゴッド・アンド・デビルの猛撃により、凱は重傷を負い、なのはは

ブラスター3で、パルパレーパを撃とうとしていた。

しかし。その前に、強力な援軍が壁を突き破って現れた。

流線型をした、イルカと鮫を模した、巨大な漆黒の機体。

「お前たちは……！！」

凱が叫んだ。

それは、緑の星の切り札のひとつ。破壊神のからだを為すもの。ジェネシック・ギャレオンとの対話のなかで知った、自律型マシン。

ジェネシックマシン。

ブロウクンガオーとプロテクトガオーであった。

二機は左右からゆりかご内部に進入、パルパレーパを挟み撃ちするポジションをとる。

プロテクトガオーが不可視の波動を放出した。

「ぬうう、ジェネシックオーラか！」

情報攻撃の一種であるジェネシックオーラは、ソール１１遊星主の機構を破壊する。

今も、パルパレーパ・プラスの両手の鉗子が、砂粒の様に分解されていく。

「ぐおぉっ」

凱の体が自由になった瞬間を見逃さず、なのはは彼を抱えて飛翔した。距離をとって後方に着地する。

「ジェネシックマシンめ！！」

パルパレーパが憤激した。

いつかのようにまた邪魔するのというのか。

パルパレーパは両腕が使えなくなったために、やむなくフュージョンを解いた。

「パルパレーパ！！」

そこへ、緑の輝きに包まれた少年と、赤い騎士服の少女が聖王のおわす玉座の間へと飛び込んできた。

「ヴィータちゃん！！」
「なのは、無事だったか」
ヴィータは、なのはの傍に降りる。安堵の息を吐きつつ、尋ねた。
「ヴィヴィオはどうした！？」
「あの男が……」
視線を上げたヴィータは、白衣の男性が、聖王として覚醒したヴィヴィオを抱き抱えているのに気がついた。
「あいつもあの蜂女の仲間か！？」
激しい眼で、白衣の遊星主を仰いだ。
そして。傷ついた凱の側には、護が降りて来る。
「護！！」
「凱兄ちゃん、大丈夫？　すごい血が……」
胸の酷い傷を見た護が、心配そうに駆け寄った。
「待って、いま治すから」
彼は、治癒の力で凱の肉体を癒そうとした。
「いや、奴を倒すほうが先だ」

凱は護の治療を断った。

「ラティオか……」

パルパレーパは憎々しげに少年を見た。

「パルパレーパ、ここで何をしている？　その人をどうするつもりだ」

護の質問に対し、彼は素っ気なく答えた。

「余興だ」

薄く嘲笑を浮かべ、パルパレーパはラティオ……護にラウドGストーンの衝撃波を放った。

その攻撃はプロテクトガオーによって防がれる。

そこへ――

「そろそろ退き上げますよ」

と、低い少女の声が割って入ってきた。

いつの間に、ここへ出現したのか。

幼い顔立ちに、フードを被った小柄な体格の遊星主。

「アベル……」

「ラティオ、あなた方もこの世界に来ていたようですね」

アベルは揶揄するような口調で護に言った。

「パルパレーパ、もうこの艦でやることはありません。ピア・デケムへ戻りますよ」

「承知した」

「ピア・デケムは墜落したはずじゃ……」

護はゆりかごへと至る前、巨大空母ピア・デケム・ピットが猛スピードで地上に落下していくのを目撃していた。

「ジェネレーティングアーマーのおかげで艦のダメージは軽微で済みました。逆に私たちを追ってきたジェイアークは、機能の損傷が著しく、我らが空母ピア・デケムに抵抗する力はないでしょうね」

「Jが……！？」

「間もなく、ピサ・ソールの修復も完全に終わります。あなた方に勝利はありえません」

「あれは消滅したはずじゃ！？」

凱は三重連太陽系での攻防のさいに、ピサ・ソールが爆発する光景を見ている。

「それはあなたの見間違いでしょう」

アベルは面白そうに笑みを浮かべる。

「行きましょう」

アベルとパルパレーパは空中へ上昇していく。

「待てっ！！」

「逃がさない！！」

凱が、護が、アベルたちを追いかけようとする。

「ヴィヴィオを返して！！」

なのはもアクセルフィンを羽ばたかせ、急追しようとした。

「なのは、あいつらは危険だ、あたしが……！！」

親友を留まらせ、自分が追跡する意思を見せた。

パルパレーパは無造作に、ゆりかごの壁を破壊、外へと向かう。

「ヴィヴィオ――――っ！！」

なのはが後を追う。

「！？」

アベルとパルパレーパ、そして彼等に合流したピルナスは、ゆりかごの上から自分達の天敵の姿を見出だした。

巨大な黒鳥――ガジェットガオーと、二対の土竜――ドリルガオー、スパイラルガオー。

即ち、これで五体のジェネシックマシンが揃ったということだ。

「破壊神を誕生させるつもりか」

聖王のゆりかごの周囲を、楕円の軌道を描きながら、三体のジェネシックマシンが飛び回る。あたかも遊星主を閉じ込めるかのようなフォーメーションであった。

「ですが、勇者はフュージョンするほどの力が残っているでしょうか？」

アベルは冷静に指摘した。

パルパレーパの攻撃で敵エヴォリュダーは瀕死の状態だったはず。

「たとえ破壊神が誕生したとしても……私たちの勝利は変わりません……絶対に」

その、アベルの言葉に呼応するかのように、空の彼方から飛来してくるものがあった。

遊星主ピア・デケムが素体である、三層の甲板をもつ巨大飛行空母ピア・デケム・ピットである。

ピア・デケム・ピットは、艦砲射撃をジェネシックマシンに発射した。回避行動のためマシンたちの軌道が乱れる。その隙を狙って、遊星主たちがゆりかごから離れ、ピア・デケムへと飛ぶ。

一方、凱やなのは、そしてギャレオンとプロテクトガオー、ブロウクンガオーたちもゆりかごから脱出してきた。

「シュート！！」

天空に消えていく遊星主に、なのはがアクセルシューターを放つ。
しかし、ピア・デケムから撃たれた艦砲射撃によって、尽く相殺されてしまう。
遊星主たちはまんまと、空母のなかに逃れたのだった。

悔しがるなのはたちに、六課の隊長、八神はやてが寄ってきた。

ゆりかご内部で何が起こっているのか。
外側から見守るはやてには、憶測でしか考えられなかった。

現在、ゆりかごは速度を落とし、崩れた破片を空中にばらまきながら、上昇していこうとしている。

はやてが爆破された箇所から、中に侵入しようとした時だ。

突如にしてガジェット群が機能を停止させた。

そして。

流星のように落ちてきた、巨大な鋼鉄の獅子が、破損した外装を突き破ってゆりかごに突入していったのである。
続いて二対のマシンが側面から内部に侵入し、後続する三機は楕円軌道でゆりかごを旋回し出す。

はやてにとっては予想外の現象であり、さらにミッド軌道上に布陣していた次元航行艦隊との連絡も途絶して、混乱に拍車をかけた。

「一体、どないなっとるんや……」

リインフォースＩＩが、ゆりかごから奇妙ないでたちのものたちが飛び出してくるのを捉えた。

「あれは」

「スカリエッティの仲間か……？」

騎士杖シュベルトクロイツを構えながら、はやては不審がった。

「あ、なのはさんたちです！！」

リインが旧知の顔を見つけ叫んだ。

「助けにいこう！！」

はやては加勢に向かうが、上空に現れた空母からの攻撃に急停止する。

なのはが放った魔法から仲間を擁護するための砲撃だったのか、誘導制御弾のみを粉砕した。

はやてが気づいた時には、連中の姿は、すでに無い。

次の攻撃が来ないうちに、はやてとリインはなのはたちの元へと飛んでいった。

そうして、数時間ぶりに再会した親友の所には、見知らぬ人物が立っていた。
ゆりかごの上には、競技場ほどのスペースが広がっている。それほど巨大な艦なのだ。
はやては、その一角に集まったなのはたちの傍らに降り立つ。
大量の血で己の身体を染めた青年と、厳しい顔つきでその傷を治療する少年。

「リイン、手伝ったって」

「はいです」

負傷した青年、凱の隣に移動したリインフォースＩＩが、フィジカル・ヒールを発動させる。
護とリインの力で凱の肉体は辛うじて死を免れた。だが、夥しい出血と疲労により、凱には戦う力が残されていなかった。戦う意思はあろうとも、肉体は限界を越えていた。

「あんた達は一体、なにもんや？」

疑問を吐くはやてに、護が答えようとする。

「僕たちは――」

「来る！！」

ヴィータが絶叫した。

無数の飛行物体が、凄まじい勢いでゆりかごに殺到してくるのが見えた。

「ガジェット！？」

いや、違う。

「ピア・デケムの艦載機！！」

護はすぐにわかった。

何度もその襲撃を受けていたからだ。

「まずい……」

反中間子艦載機は衝突した相手と追消滅を起こして爆発する、危険な兵器であった。

「あんなに……ゆりかごごと、うちらを攻撃する気か！」

「あいつらにはもう必要ないんだ、この艦は」

護は凱の腕を掴んで言った。

はやては一瞬で判断する。艦載機がゆりかごに接触する数秒の間に、すべてを撃墜するのはいくらエースがいるとはいえ、不可能だ。はやてはすぐに、艦載機への攻撃を断念した。

「ここから離れよう。ギャレオン！！」

カインの遺産たる鋼鉄の獅子は、頷くように吠えると、スラスターを噴かせ、浮かび上がる。その背に護は凱を連れて乗った。

「みんなも、早く、逃げるんだ！！」

「全員、ゆりかごから待避せよ！！」

はやては戦っている魔導師たちに指令した。

なのはたちは、高速飛行でゆりかごの背中から離脱。

ジェネシックマシンたちも急な加速で戦闘空域から離れていった。

「リイン、広域結界いくで！！」

「はい！！」

ユニゾンしたはやては、急いで結界の魔法にとりかかった。

攻撃と違い、照準を合わせる必要はなかった。時間もない。

とにかく、この空域全体を結界で覆う。そのために、完全な詠唱は諦めるしかない。

はやてはなのはとヴィータにも広域結界を頼んだ。

多重の結界を張ることで、被害を食い止めようという算段である。

「守護する盾。風を纏いて鋼と化せ。すべてを阻む祈りの壁。来たれ我が前に！！」

《Ｗｉｄｅ　Ａｒｅａ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

はやてが発動させる前に、いち早くなのはが結界を完成させた。ほぼ、ゆりかごをすっぽり包み込むために、カートリッジを二発以上ロードしなければならなかった。

オーバーＳランクの魔力を振り絞ったはやての結界が、起動する。

ヴィータも主に続いた。

部隊長をサポートするべく、戦闘空域にいた空戦魔導師たちが強装結界を張る。

数百の艦載機がゆりかごに特効していく。

閃光と爆発で空はまばゆい輝きに覆い尽くされた。

古代ベルカの遺産。巨大質量兵器。強大なロストロギア。聖王のゆりかごは、装甲を、艦体を、駆動炉を、兵装を、防衛機構を、すべてを、追消滅させられていった。

放射線状に光の爆発が拡散、周囲の物質をも誘爆して、連鎖を巻き起こした。

「くっ……」

広域結界とゆりかご消滅の余波が衝突する。

エネルギーの暴風を、結界が受け止めた。

#8　落暉

沈みゆく夕陽が、ジェイアークが横たわる平原を、紅く染めていく。宇宙最強と呼ばれた超弩級戦艦ジェイアークも、今は精彩を欠いた姿で、夕闇に飲み込まれつつあった。

「アルマ……」

艦体の表面に手をついて、ソルダートＪ－００２は、苦い気分を味わっていた。

みすみす奪われてしまった戦友。契約を交わしたパートナー。だが、奴から助け出すこともかなわなかった。

「せめてペンチノンが蘇ってくれたら……」

ジェイアークの制御を司る生体コンピューター、トモロ。ペンチノンはゾンダリアン時代からの名称であり、朋友としていままで戦場を駆け巡ってきた。

「アベルの強制停止コマンドさえ予想できていれば……いや、やはり無理だったか……」

創造主アベルの力により、ジェイアークは全ての動力源を遮断され、トモロも意識を回復することはなかった。

ＪもＪジュエルのパワーを封じられ、一切の武装が使えない状態だ。これではソール１１遊星主と満足に戦えない。

（どうすればよい？）

ジェイアークは大破を免れたものの、艦体のあちこちに損傷が見られた。ジュエルジェネレーターがダウンしたために自己修復機能も作動できない有様である。

（もう一度、お前を空へ羽ばたかせたい……！）

そう熱く、Ｊは胸に叫んだ。

その彼を、Ｇストーンサイボーグの少女ルネが、黙ったまま、見つめていた。

かつて、ルネは遊星主と戦い、負けた。その時に感じた敗北感や屈辱感をＪも噛み締めているのだろうか。

確実に言えることは、反撃の思いを失わなければ、それは真の敗北を意味しないということ。

そうだ。私は次こそ……遊星主を倒す。

鋼の拳を握り締め、ルネは戦意を燃やした。

「ごめん、遅くなった」

そう言いながら、二人のもとに近づいて来る影がある。

黄金色の髪を伸ばした、美しい女性。時空管理局執務官、《心優しき金の閃光》フェイト・テスタロッサ・ハラオウン。

現在は機動六課に出向し、ライトニング分隊の隊長を勤めている。

ジェイル・スカリエッティ本拠地での制圧戦において、事件後の収拾と重機の手配などの処理に追われ、一時間ほど時間を取られた。彼女はJとルネについて、スカリエッティを殺害した者たちとは敵対関係になるとして、保護と事情聴取の許しを上からもらってきていた。ここら辺、人望篤い執務官だからこそすんなり願望が通ったともいえよう。

「やっぱり、何回見てもこの艦はすごいね」

巨大なジェイアークを見上げ、フェイトは感嘆の声をあげた。

伝え聞いた大きさや出力は、アースラやクラウディアといった次元航行部隊の艦と較べても、遜色ないどころか、凌駕さえしているだろう。

「だが、この状態では翼を折られた猛禽に等しい――」

Jは自嘲気味に呟いた。彼にしては弱々しい言い方だ。

「折れた翼……」

フェイトは数年前の事故を思い出した。あの時も、翼を失った友が、二度と飛べないのかと絶望に泣いた事があった。

けれど。

フェイトは知っている。

「たとえ一度は折れた翼でも、再び空へと羽ばたけるはず……」

諦めなければ。不屈の心があれば。必ず、復活する。

――だったよね、なのは。

「私もジェイアークが飛べるように、協力する」

だから。立ち上がろう。

「……助かる。ありがとう」

フェイトの誠意を感じ取ったからか、Ｊは素直に礼を言った。それとも、と、ルネは思う。

この男も、美人には弱いって、ことか？

（あたしだって悪くないはずなんだけどな……って、なにを考えてんだよ……！）

「どうした、ルネ？」

ルネの表情が変わったのを目で捉えたＪが聞いた。

「なんでもねぇよ。……それより、捕まえた害虫どもはちゃんと檻ん中に放り込んできたのかい？」

と、ごまかすように、ルネはフェイトに質した。

「ええ」

フェイトは首肯して話し出した。

「六課や地上本部はまだ完全な修復が済んでないから、近隣の地上部隊の建物を使わせてもらったわ」

「ふーん。しかし、そいつらはテロリストなんだろ？　その場で処分しないのか」

ルネは銃を撃つ仕草をした。

「とんでもない。犯罪者でも裁判を受けてから、その後の処置を決めないと、私たちは何のために法の番人なのかが見失われてしまう」

少なくとも、その場の感情で犯人を処刑するような権限は、管理局員には与えられていない。かなり自由な捜査権をもつ執務官でも、あくまで「逮捕」が基本である。

ルネは同じ捜査官ということでフェイトには親近感を覚えていたが、犯人に対する考え方に関しては微妙な乖離があった。

「あたしなら、逮捕なんて生温いことはしない。害虫なんだし、追い詰めたら駆除するのが世の中のためだろう」

ギムレットを倒した時もそうだった。ルネはいつでもそう思いながら、バイオネットと戦い続けてきた。

フェイトはその思いは怨恨からくるのだろうと、推測した。

「ルネ、だったら私も……あの時に処分されてなきゃだめだったってことになるね」

「え？」

ルネはフェイトの顔を見た。
少し寂しげな瞳に、なぜかうろたえる。

「私はね、どんな罪を犯した人にも更正する機会は与えるべきだと思うんだ。昔の私みたいに」

あるいは。夜天の主や守護騎士たちのように。

「……あんた……」

「それが執務官としての、私のスタンスよ」

「……まぁ、それはあんたの勝手だしね。差し出がましいあたしが悪かったよ」

謝りながら、では、バイオネットについて知っても、彼女はそう言えるんだろうかと疑問に思った。

後になって、彼女の生い立ちを聞いた時に、やはり彼女ならバイオネットの連中も許すんだろうな、とルネは得心したという。

「ところで、そちらの手配はどうなっている？」

「ロングアーチの整備チームが急いでこっちに向かってる。整備用ドックに運んだら修理が開始できるから、もう少しだけ待っててね」

「わかった」

Ｊは頷いて了承した。
フェイトは二人が共にサイボーグであり、ルネがある組織のエージェントである……ということしか知らない。他に情報を聞き出していないため、二人は謎めいた存在であった。
このジェイアークは遺失物なのか、二人の関係は、遊星主とは何者なのか……等々、好奇心が大いに刺激される。
ただ、執務官としての勘は、二人は悪い人物ではない、と告げていた。

「そういえば二人とも、大丈夫？　ひどく疲れてるみたいだ」

たしかに、Ｊもルネも遊星主と戦い、消耗が激しかった。殊にＪジュエルの機能停止に陥っているＪは、機体に枷を縛りつけられたような状況である。

「リカバリーする」

「なんだと？」

「はぁ？」

フェイトは首を捻る二人に、デバイス――バルディッシュを向ける。
サイズフォームのバルディッシュに治癒の魔法を起動させた。
ほとばしった金色の魔力が、ＪのＪジュエルと、ルネのＧストーンに吸い込まれた。
その宝石のような形状から、デバイスだと思ったからである。

「うおっ！？」

「これは……！」

Ｊジュエルと Ｇストーンは、虹色の光を明滅しはじめた。

「えぇっ、誤作動！？」

フェイトは驚き、バルディッシュに確認させた。

《Ｉ　ｄｏｎ'ｔ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ》

バルディッシュも原因を突き止められず、不明と答えた。
魔法は問題なく発動したはずだ。それなのに、このような現象が起きるとは。彼にも想定外であった。

フェイトは未だに勘違いをしていたのだ。
二人が次元世界の住人で、ミッドチルダ式魔法を操る魔導師なのだと。または、何らかのロストロギアに関係する、技術者なのかもしれない、とも。

その全ての思い込みは、結局間違いであった。
とは言え、遥か時空を（それも１５０億の時間をも）越えた場所で産まれた戦士だと、フェイトに想像できるはずもない。

Ｊは自分の体が変質していくのを感じていた。

「Ｊジュエルの封印が……！！」

闇のとばりが落ちていくなか、Ｊの驚愕の声が響き渡った。

#9　伝説の終焉

『それじゃあ、クロノは無事なのね？』

時空管理局本局、総務統括部に勤めるリンディ・ハラオウンは、人事部のレティ・ロウラン提督より、ミッドチルダで起きた事件の詳細を受け取っていた。

「中規模の次元震に巻き込まれたものの、艦隊は奇跡的に全滅を免れたらしいわ。シールドを全開にしたせいで、艦艇に負担がかかって、航行機能がほとんど麻痺してるみたいだけど――」

『死傷者もゼロなのね』

「ええ。でも、艦隊は全く無力化された状態だからもし、何か起こったとしても、満足に対処できないと思う」

眼鏡の奥に懸念が過ぎった。

『でも、今のところは安心なのね』

クラウディアとはつい先程、通信回線が繋がったばかりであり、レティ提督にも断片的にしか情報は伝わっていない。

「クロノ君からは早急な救助と援軍の要請が来たわ」

人事を司る彼女にしたら、急な仕事が入ったといった状況だが、無

論、無下にするはずもない。クロノの口調から、かなり喫緊を要する事態らしい。

『急な手配だと思うけど、私からもお願いするわ』

親友に、リンディは頼みこんだ。

「わかってる。手の空いてる次元航行艦をかき集めて、人員と共に送り出すわ」

『それと、ミッドの地上なんだけど……』

そこでは、彼女の娘たちが、次元犯罪者と戦っているはずだった。

「広域指名手配されてる、ジェイル・スカリエッティの件ね。古代ベルカの遺産《聖王のゆりかご》を掘り起こした技術者……」

管理局ミッドチルダ地上本部を襲撃し、機動六課に打撃を与え、甦った巨大戦艦でミッドチルダそのものを危機の渦中におとしめた。

「現場から入ってくる情報はどれも錯綜していて、私もあんまりよく理解してないんだけどね」

彼女は、リンディにＪＳ事件の顛末を聞かせた。

にわかには信じ難い話なのだが……。

聖王のゆりかごを巡り、六課とスカリエッティが交戦していた時である。

事件の首謀者スカリエッティは、突然現れた人物により殺害され、

そのアジトも崩壊した。
同時刻。ミッドチルダ上空を飛行していた聖王のゆりかごは、正体不明の飛行空母から攻撃を食らい、破壊される。
他にも、ゆりかご埋設地の近辺に墜落した白い艦艇についても報告されていた。
「地上は市民の避難が的確に進んだのと、地上部隊の奮闘で死傷者は極僅か、アースラも被害はなかったそうよ」
『そう』
リンディは安堵感を覚えた。
「建物とかは次元震や戦闘の余波で倒壊なんかもあったみたいだけど、まぁ、最悪の事態には及ばなかったから、良しとしないと」
地上部隊が必死に頑張って被害を食い止めようとした結果だと言える。
「残念ながら、地上の護りを指揮していたレジアス中将は殉職なさったみたいだけど――」
『まぁ……』
リンディは悼ましげに目を伏せた。
黒い噂は絶えなかったが、リンディはレジアス・ゲイズを辣腕家として評価していた。
「現在、はやてさんたちが治安回復のために動いてるけど、六課は

スカリエッティとの戦いで受けた痛手から完全に立ち直ってないらしいの。海だけでなく、陸に対しても、本局から応援部隊を派遣するつもりよ」

『陸のひとたちは嫌がるかもしれないわね』

「そんなこと言ってる場合でもないしね」

そこらへんの折衝はクロノに任せればよいだろう。
リンディも息子が押し付けられた責任を立派に果たすだろうと信じて疑わなかった。
リンディはそのクロノやはやてが充分に力を発揮できるように、裏方としてサポートするつもりだ。

「その、クロノ君なんだけどね……」

次元震によって発生した衝撃波に翻弄され、クラウディアら航行艦隊は態勢を立て直すまで、しばらく時間をかけねばならなかった。
クラウディアの索敵機能が復旧したので、クロノは直ちに周辺空間のスキャンを命じた。

すると、驚くべき代物が発見されたのである。

ミッドチルダから一億キロ離れた宙域に、全長数万メートルはあろうかという、巨大な天体が観測されたのだ。

「まるで恒星のようだけど、スキャンによって、普通の天体ではないと判断されたわ」

詳しく走査しようとしたが、バリアのようなものに妨害され、上手

くいかなかった。

『それは本当に天体なの？』

「おそらく人工天体だと考えられるわね」

データ不足で安易な結論は裂けるべきだとは言われたが、ただ、

「機動六課から報告された《ソール１１遊星主》となんらかの関係はあると見做していいでしょうね」

『遊星主？』

「わからないけど、とんでもない連中みたいよ。ゆりかごを呆気なく破壊したとかね」

『……』

とりあえず、クロノ率いる艦隊は問題宙域に留まって、謎の天体の観測と地上の支援を続ける事に決まったという情報をもって、この話は打ち切られた。

「まぁ、クロノ君から連絡がきたらまたすぐに知らせるわ」

『ありがとう』

リンディは短く頷いて、礼を言った。

「心配だと思うけど、あの子たちは強いからきっと大丈夫だと思う

わ」

レティの息子グリフィスは機動六課に所属している。
しかし、彼女は息子の能力を信じていた。母親のひいき目かもしれないが。

『そうね。強いものね。私たちよりも、ずっと――』

かつて、彼女が担当した難事件が解決できたのも、彼らエースがいたからだった。
そして、今回もきっと、エースたちと彼らに鍛え貫かれたストライカーたちによって、事件は終息に向かうだろう。

リンディはそう思いながら、通信をオフにする。

レティはため息を吐くと、再び各部署に連絡して、手配を依頼していく作業に戻った。

管理局本局は、にわかに慌ただしく動きはじめた。

#10　そして神話へ

ミッドチルダ上空。

聖王のゆりかご。

その崩壊には、莫大なエネルギーの暴発が伴っていた。

大地が焦土と化さなかったのは、なのはたちが最大出力で展開させた防御結界のおかげだった。

破壊力の波及を、ギリギリで阻止したのである。

「ふぅ。危ないとこやったわ～」

八神はやては、額から流れる汗を拭いながら呟いた。

「さて、と。ゆりかごは消滅したし、もうここにいる理由もないかなぁ」

はやてはロングアーチスタッフに連絡。地上への帰還を指示した。

すぐにヘリが飛んで来るだろう。

「あとで、あんたたちのこと、たっぷり聞かせてもらうな」

と、ギャレオンに乗った天海護や獅子王凱らに言った。

「は、はい」

その時、なのはの口から悲鳴が零れた。

「レイジングハート！？」

なのはの愛杖、《魔導師の杖》レイジングハートに異変が生じていたのである。

杖の基幹である赤い宝石部分から、緑と赤の輝きが断続的に放射され、鼓動のように点滅を繰り返した。

「これは……どないしたんや！？」

「わからない。こんなの初めて見るよ」

なのはは不安そうに言った。

「魔力の負担が機体に影響してるんじゃねぇのか？」

ヴィータが傍らから呟いた。

「リイン、なんかわからへんか？」

「私にも何が何だか……」

「マリーかシャーリーなら、わかるかも……」

ヴィータのことばに、なのはは頷いた。

「うん。そのほうがいいと思う」

レイジングハートになのはが呼びかける。

「レイジングハート、大丈夫？」

《Ｄａｎｇｅｒｏｕｓ．Ｄａｎｇｅｒｏｕｓ．Ｄａｎｇｅｒｏｕｓ……》

同じ内容だけが返ってきた。

「レイジングハート、聞こえる？　待機モードにリリース……お願い！」

《Ｄａｎｇｅｒｏ……Ｄａ……Ｍｏｄｅ……Ｒｅｌｅａ……ｓｅ……！》

ばしゅぅぅっ！！

一瞬、光を放ってから、レイジングハートは杖からネックレスの待機モードへ変化した。

「レイジングハート……大丈夫なの？」

《Ｎｏ　Ｐｒｏｂｌｅｍ．Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ》

問題なしと答えるレイジングハート。だが、その声質が若干変わったような気がした。

「ほなら、ヴァイス君を悠長に待っとられんな。彼には悪いけど、さっさと下に降りよう」

はやてが促した。
普段はレイジングハートが自動的に起動させるフライアーフィンだが、レイジングハートの身を慮り、なのはは自ら魔法を使い、皆と降下を開始する。
それに凱たちも続く。

なのはは最後に、空の彼方を振り返った。

もはや姿は確認できないが、遥か大気の向こうに遊星主たちがいるはずだった。

（ヴィヴィオ……）

我が子とも呼べる、娘。
取り戻せなかった、娘。

（待っていて）

今度こそ。
ママが。

（助けるから――）

その顔を、ギャレオンの背から、凱が見ていた。

（あの輝き……もしや）

いや。そんなことがあるのだろうか……。
だが。
（あの時。俺の体のＧストーンが反応した……）
そうだ。かつて源種大戦終結後の自分がそうだったように。――
彼は奇跡は存在すると、知っていた。
ひょっとしたら、あれは奇跡の片鱗なのではあるまいか。
（待てよ……）
ならば。可能性としてＧＧＧのみんなもこの世界に来ているとは考えられないだろうか。
希望が湧いてきた。
もしも。ＧＧＧ機動部隊と、この世界で合流できたなら。
遊星主とも戦える。
（探そう。皆を――）
そうさ、俺たちだけがこの世界に飛ばされたなんて。
信じられない。
（奇跡は起こせるんだ。勇気があるのなら、必ず）

……Ｊジュエルの機能が一部、回復した！？

平原に横たわるジェイアークの側。沸き上がる力に、ソルダートＪは驚愕した。

まるで身体が軽くなったような、感覚だ。

「ど、どうしたの！？」

事情がわからぬフェイトは狼狽した。

「おい、ジェイアークもか」

「いや、ジェイアークのジュエルジェネレータは停止したままだ。どうやら私だけパワーが戻ってきたようだな」

「でもなんで、奴が仕掛けた凍結コマンドが解除されたんだ？」

「もしかして私のリカバリーのせい……？」

ルネはおどおどとするフェイトに、尋ねた。

「さっきのあれは、何なんだよ」

「なにって」

フェイトは目をぱちくりとさすた。

「魔法だよ。回復の」

「魔法……」

そんなもの、本当に存在するのか？
半信半疑にルネは眉をしかめた。

「えっと。とりあえず、マリーに見てもらおう。きっと何が起こったかわかりよ」

「もしかすると、力が完全に回復するかもしれないのか」

「どうするＪ。私は着いていこうと思うけど。いろいろ聞きたいこともあるし」

「あぁ、いいだろう」

Ｊジュエルのパワーを確かめるＪが、頷いた。

「よし。じゃ、決まりだな。その魔法について教えてもらおうか」

勇者たちとエースたちの運命は、ゆっくりと絡みはじめていた。

そして。

いま、伝説は終焉を迎え――

神話が、はじまる。

終章　神々の黄昏

ソール１１遊星主の移動母艦、三層式空母ピア・デケム・ピットの艦橋。

「それでアベルよ、これから先をどうするつもりだ」

白衣を着た医者に似た風貌のパルパレーパが、小柄な少女の姿をした赤の星の指導者に問うた。彼女の周りに、ポルタンやピーヴァータ等遊星主たちが取り巻いている。

「この世界の住人が持つデータを収集したが、三重連太陽系へと戻るために必要な情報に関しては、あまり芳しいものではなかったぞ」

「そうですね……」

アベルもゆりかごなる艦から情報を引き出したが、彼の計画に役立ちそうなものは少なかった。

「まさか、異次元世界に飛ばされるとは思ってもみませんでしたね」

三重連太陽系。彼女たち遊星主は、圧倒的な力で、ＧＧＧやソルダートを敗北させんとしていた。

ただ、Ｇクリスタルの速やかな破壊が遅れたせいで、ジェネシック

オーラをギャレオンに充填されたのは悔しいが失策だった。
とは言え、こちらのペイ・ラ・カインがギャレオンにフュージョンしてしまえば、勝ったも同然である。ジェネシックの力なきラティオなど赤児にも等しいからだ。
だが。さすがのアベルも、葬り去ったはずの勇者が生きていたことは思考の埒外だった。
あまつさえ勇者はギャレオンに選ばれ、ジェネシックの力を我が物にしていたのだ。
苦しい戦いを悟ったアベルは、態勢の立て直しを計った。
ピサ・ソールを爆発させ、めくらましに使い、ＥＳウィンドウを開いてレプリジン・地球の裏側に逃れるつもりだった。
地球には、彼らの仲間がいる。まさか仲間ごと我々を攻撃するのは躊躇するはず。
過失があるとすれば、ピサ・ソールの爆発によって生じる衝撃が予測を越えていたことだ。
生身の生命体を凌駕する人工のプログラムならば、至近での爆発でもダメージは少ないと計算していた。
それに、爆発するのは、複製されたレプリジン・ピサ・ソールだ。
一瞬で複製し、爆発させればラティオも油断する。
オリジナルはパーツに分解して移動すれば、奴らも気づくまい。
だが、アベルの目論みは外れた。

ピサ・ソールの爆発は、時空の歪みを引き起こし、次元の壁を揺るがした。
ディバイディング・ドライバーの空間湾曲などの比ではない、空間そのものの捻れに、彼らは巻き込まれたのだ。

時間と空間を飛び越え――――

遊星主はこの世界に落ちていった。
ギャレオリア彗星は時間を越える次元ゲートではあったが、異次元世界にまで繋がるような代物ではない。
偶然の産物がギャレオリア彗星では到達できない世界へと遊星主たちを飛ばしたのである。

「この、次元世界と呼ばれる場所には、様々な宇宙への入り口があり、それを時空管理局という組織が押さえているようです」

「では、そこを襲うのか」

「ピサ・ソールが完全に回復するのを待ってからですが」

物質復元装置であるピサ・ソールは遊星主の切り札だ。
ラティオらとの戦いには欠かせないだろう。

「それで、もし。三重連太陽系に戻れることができなかった場合ですが……」

「ふむ」

「その場合は、この世界を、新たな三重連太陽系として再生させましょう――」

アベルは、狂気にも似た光を双眸に浮かべて、言った。

「三重連太陽系は必ず再生させなければ、なりません……」

にやりと、唇を吊り上げる。

「たとえこの世界を滅ぼして、でも……」

――そのための、宇宙再生プログラムなのだから……。

「さぁ、ラティオ。私たちを止めれるものなら来なさい。あなた方の勇気など、無力なものでしかないことを、私が証明して差し上げますよ」

パルパレーパやピルナスら遊星主たちに囲まれながら、アベルは冷たい微笑をいつまでも浮かべていた。

終章　神々の黄昏（後書き）

第一部はこれで終わりです。

暑いので気が向いたときにしか執筆できません

第二部をいつ書くかは私にもわかりません……

なにか別のを書くかもしれません……

では

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2998m/

悪魔王ナノガイガー 第一部・邂逅編

2010年10月14日13時05分発行